

第一章：この世界を 愛した司祭 (11Q07)

1. 私は無価値なみじめな
者、しかし価値ある愛で一杯
の者 (11Q07)

2010/07/15

11Q07 要するに、自己の弱さを把握
することで、絶え間ない戦いに奮い
立ち、慣れや惰性に陥ったりするこ
とはなかったのですね。

11A07 1950年、二十歳そこそこの私
に師が頼んだことを今でもはっきり
と覚えています。神を心から愛して

いる人の自然さで「今日は自分の敬虔の足りなさを悲しんでいます。償いをするため私を手伝って欲しい」と言ったのです。このように緊急事のように頼まれたことは、私の心に深く染み透りました。創立者は信心深くなるために、とても努力していたことを私は知っていましたから。1953年私たちを次のように励ましました。「がっかりせずに必要ならいつでも放蕩息子のようにすることです。始めること。心から痛悔して赦しを願い、やり直す。これは神なる主がたいへんお喜びになることです。神は私たちがどんなものか、よくご存じですから。それゆえ、いつも主に立ち戻りなさい。愛を込めて戻りなさい。神は私たちを待っておられるのです。」

主を益々深く愛するため、絶えず自分への要求を強めていました。1966年、また様々な機会に、次のように話しています。「私たちの生活の超

自然的な意味を糾明しましょう。自分自身を探しもとめているのではないか、習慣的になって、主との出会いを疎かにしているのではないか。もし習慣的になっているなら、愛が廃れだしているからです。この主への愛こそが、私たちの生活を意義あるものにし、私たちを本当に役立つ者にするのです。」1970年2月14日、私に言いました。「今日の日を、よく振る舞おうと決意して始めました。神の内に深く入り込み、神の栄光を奪うことのないよう努めよう。多くの惨めさを持ちながら、こう決意します。私の惨めさの何と多いことか。」間断なく神を捜し求めようと決心していたのです。